

子育てサロンにおけるスタッフの心的傾向と考察 —大阪府K市 子育てサロンのスタッフ意識調査から—

梅 野 和 人

key word : 子育てサロン、地域、母性愛傾向

はじめに

2012(平成24)年8月に施行された「子ども・子育て支援法」(平成二十四年八月二二日法律第六五号)第一章総則では、その目的として第一条に「この法律は、我が国に置ける急速な少子化の進行並びに家庭及び地域を取り巻く環境の変化に鑑み、児童福祉法(昭和二十二年法律第百六十四号)その他の子どもに関する法律による施策と相まって、子ども・子育て支援給付その他の子ども及び子どもを養育している者に必要な支援を行い、もって一人一人の子どもが健やかに成長することができる社会の実現に寄与することを目的とする。」と記され、家庭や地域が協働して子どもを育て成長を見守る社会の実現を目指すことが謳われている。また基本理念として第二条では「子ども・子育て支援は、父母その他の保護者が子育てについて第一義的責任を有するという基本的認識の下に、家庭、学校、地域、職域その他の社会のあらゆる分野における全ての構成員が、各々の役割を果たすとともに、相互に協力して行わなければならない。」としている。内閣府子ども・子育て支援新制度施行準備室(2014)は、『子ども・子育て支援新制度について』の中で、「核家族化の進展、地域のつながりの希薄化、共働き家庭の増加、依然として多くの待機児童の存在、児童虐待の深刻化、兄弟姉妹の数の減少など、子育て家庭や子どもの育ちをめぐる環境が変化」していることを認め、子ども・子育て支援の意義のポイント(基本指針)として「保護者が子育てについての第一義的責任を有することを前提としつつ、上記の環境の変化を踏まえ、地域や社会が保護者に寄り添い、子育てに対する負担や不安、孤立感を和らげることを通じて、保護者が自己肯定感を持ちながら子どもと向き合える環境を整え、親としての成長を支援し、子育てや子どもの成長に喜びや生きがいを感じることができるような支援をしていくこと。」と記している。

問題と目的

現在、少子化対策として取り組まれている子育て支援事業は、家庭的保育やつどいの広場等、様々な資源を活用して行われている。その中でも支援事業は、保育所や幼稚園等これまで地域と密接にかかわる専門機関が中心となつてすすめられている。さらに地域子育て支援拠点事業である子育て支援センターなどと連携しながら子育て家庭のきめ細かいニーズに応じてい

る。加えて地域における子育て支援のひとつとして子育てサロンがある。子育てサロンは社会福祉協議会が中心となって市町村地域の各小中学校区に設けられることが多く、地域の人的資源が活用されている¹⁾。この支援事業の特徴は、近隣の地域に住む民生委員や主任児童委員をはじめ、ボランティアや保育士の有資格者などの人々が支援者であり、子育て家庭が直面する様々なニーズの受け皿となっている点である。住田(2010)は、「子育てに関していえば、子育ての知恵や工夫が、地域の日常生活を通して伝えられ、悩みの解決には至らずとも、気軽に悩みを吐き出すことのできる場が必要不可欠である。」²⁾と述べている。子育てサロンのスタッフが子育て家庭と関わることによって、母親の育児不安の解消に役立ったり虐待防止等につながるきっかけにもなっている。子育てをする親及び保護者は、子どもを育てる中で些細な悩み事や心配ごとなどを親近者や近所の知人に相談することが多い³⁾。このような理由から子育てサロンが地域に増加し、子育て家庭に対する役割と支援の重要度は高まっている。一方で、子育てサロンのスタッフが地域資源として自らをどう位置づけるかが問われ、子育て家庭の現状の理解と基本的な相談支援の方法について支援者として自ら認識する必要性が高まっている⁴⁾が、支援者の認識は未だ十分とは言えないのが現状である。

本研究では、子育てサロンスタッフの支援意識の向上や子育て家庭への理解を図るための具体的な方法について発信することを目的に量的調査を行った。調査によって得られた基礎データから、子育てサロンのスタッフの子育て傾向や意識を明確化することにより、子育てサロンが今後、地域で真に果たす役割について検討していく資料とする。

方法

2012年8月、大阪府K市の市社会福祉協議会職員に研究の主旨を説明し、協力を求めた。その後、子育てサロンの定例代表者会議において中学校区別子育てサロンのスタッフ代表者に対してアンケート調査の主旨及び内容を説明し、各地区のスタッフに回答して頂くよう依頼した。アンケートは無記名回答、属性として年齢、支援地域、子育て経験の有無等を質問した。約1か月後、22学校区中、16学校区(回収率72.7%)のアンケートを回収した。回収数は180であった。

調査質問項目

質問項目は、先に述べた属性の他に「子育て」や「子ども」のイメージについていくつか項目を挙げて複数回答を求めた。「子育てのイメージ」では、「楽しい」「つらい」「安らぎ」「悲しい」「責任」「難しい」「面倒くさい」「大変」「重たい」「戸惑い」「元気になる」「自然」「不安」「孤独」「きずな」「生きがい」「感動」「面白い」「しつけ」「後悔」「損」「くやしい」「無力」「優しい」「うれしい」の25項目について5項目を選択してもらった。「子どものイメージ」では「かわいい」「うるさい」「楽しい」「苦手」「面白い」「面倒」「安らぐ」「合わない」「癒される」「汚い」「うらやましい」「宝もの」「憎らしい」「その他」の14項目について3項目を選択してもらった。また、母性に関する質問項目として「母性愛」信奉傾向尺度項目⁵⁾を参考にした。それに子育てサロンに関連した質問項目を加えて20項目とし、5件法で回答を求めた。

「母性愛」信奉傾向尺度は、江上(2011)によって「社会的文化的通念として存在する伝統的

性役割観に基づいた母親役割を信じ、それに従って育児を実践する傾向」と操作的に定義し⁶⁾作成された尺度である。子育てサロンのスタッフは子育てを経験した人が多く、そのため子育て経験による母親としての有り方や子育てについての考えを持っている。それらは“母性”と呼ばれ、一般的に女性が持つとされるものであるため、そのような概念への世代間認識や意識の違いを明らかにすることによって子育てしている家族への関わり方の参考にできると考え、この尺度を参考にした。

結果

子育てサロンのスタッフ年齢は60歳代が86人（48.3%）で、全体の約半数であった。70歳代の43人（24.2%）と合わせると全体の7割を超える結果であった。スタッフの性別は女性が8割以上（146人）で、男性は2割程度（34人）であった。子育ての経験は、「ある」が97%であった。

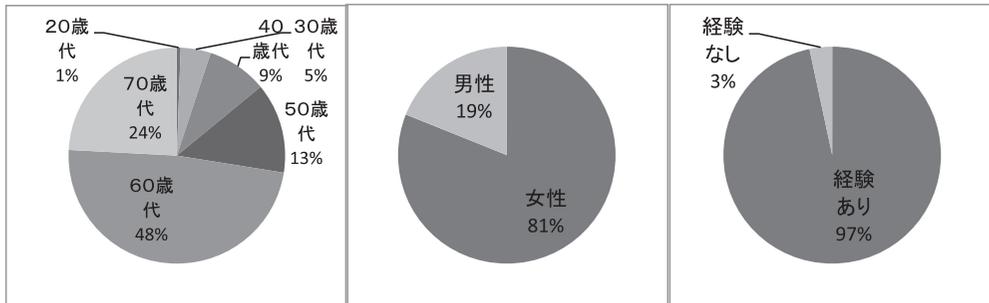


Fig 1. サロンスタッフの年齢割合、性別、子育て経験の有無

子育てのイメージを複数回答で求めたところ、「楽しい」（72.8%）、「責任」（48.3%）、「大変」（46.7%）、「感動」（40.6%）、「元気になる」（37.8%）、「生きがい」（34.4%）、「難しい」（34.4%）などの項目が上位であった。この結果を男女別に分類した結果、「楽しい」（女性77%・男性56%）、「大変」（女性49%・男性35%）、「感動」（女性45%・男性21%）、「難しい」（女性32%・男性47%）であった。

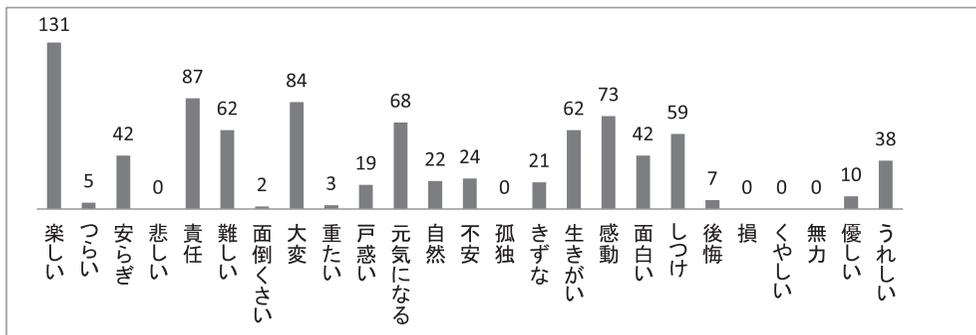


Fig 2. 「子育て」イメージ (25項目中5項目選択)

子どものイメージは、「かわいい」(95.6%)、「癒される」(51.7%)、「宝もの」(36.7%)、「楽しい」(36.7%)などが多数であった。

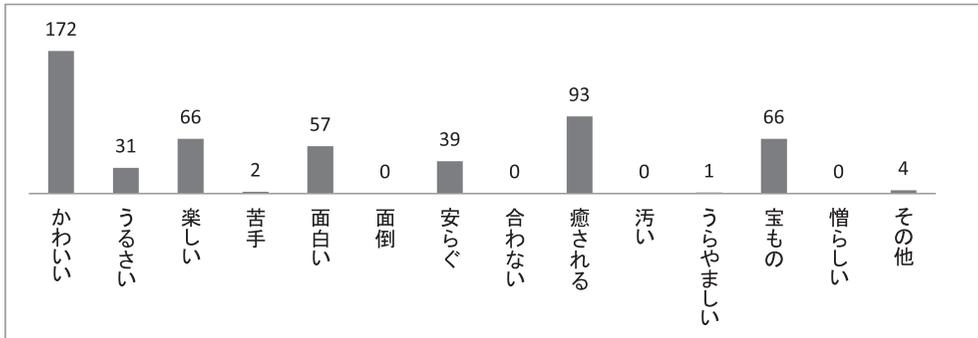


Fig 3. 「子ども」イメージ (13項目中3項目選択)

子育てイメージと同様に男女別に分類した結果は、「かわいい」(女性97%・男性95%)、「癒される」(女性52%・男性50%)、「宝もの」(女性39%・男性26%)、「楽しい」(女性38%・男性32%)であった。結果から大きな男女差は見られなかったが、「楽しい」と「宝もの」の項目を比較すると、各年代の傾向に違いが見られた。

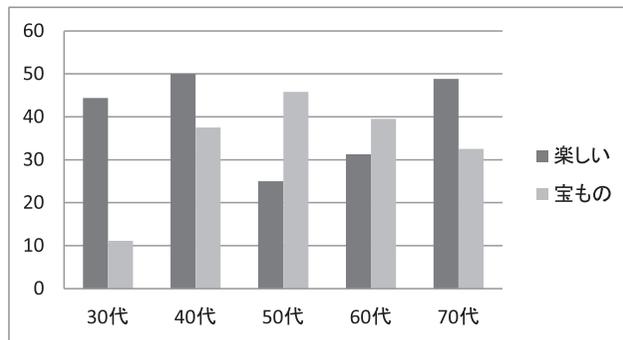


Fig 4. 回答項目「楽しい」と「宝もの」の年代別比較

次に「母性愛」信奉傾向尺度の13項目について因子分析を行った。因子抽出法は主成分分析を採用し、Varimax法により8回の反復で収束した結果、3つの成分に分類できた。説明割合は66.7%であった。3つの成分を分類する際に、「母性愛」信奉傾向尺度の質問項目を参考に成分に項目名を付けた。質問項目の問9、問11、問12、問13、問14、問15、問16の成分名を「母性意識因子」と付けた。問4、問6、問10の成分名は「母性行動因子」と付けた。問3、問5、問8の成分名は「母性像因子」と付けた。

Table 1. 「母性愛」 信奉傾向尺度の因子分析結果

	母性像因子	母性行動因子	母性意識因子
問3. 母親になることが、女性にとって存在のあかしだ。	0.81	0.084	0.221
問5. 子どもを産む母親だからこそ、子育ては何にも差しおいて母親が行うべきだ。	0.725	0.383	0.143
問8. 母親であれば、育児に専念することが第一である。	0.726	0.181	0.323
問4. 子どものためなら、どんなことでもするつもりでいるのが母親である。	0.352	0.754	0.047
問6. わが子のためなら、自分を犠牲にすることができるのが母親だ。	0.227	0.825	0.228
問10. 子どものためなら、たいていのことは我慢できるのが母親だ。	0.232	0.65	0.524
問9. 育児は女性に向いている仕事であるから、するのが自然である。	0.308	0.318	0.613
問11. 母親の愛情ほどに偉大で、気高く無条件なものはない。	-0.105	0.504	0.698
問12. 子どもを産んで育てるのは、社会に対する女性のつとめである。	0.327	0.192	0.646
問13. 何といっても子どもには産みの母親がいちばん良い。	0.317	0.062	0.753
問14. 育児に専念したいというのが、女性の本音である。	0.201	0.111	0.758
問15. 子どもが小さいうちは、母親は家庭にいて子どものそばにいてやるべきだ。	0.376	0.14	0.647
問16. 愛情はもちろん、子どもを自分よりも大切に思う気持ちや行動が、絶対に必要だ。	-0.068	0.52	0.58

「母性愛」信奉傾向尺度の因子分析によって分類された各因子について、年齢別に区分しグラフ化した。特徴的な傾向として30歳代から50歳代にかけて「母性行動」「母性認識」「母性像」の順でほぼ同じ経過を示しており、その後60歳代から70歳代にかけて異なる3つの因子数値が近づく傾向が見られた。また、3つの因子が共通して30歳代から40歳代にかけて等しく数値が下がり、その後年代が進むにつれて増加が見られた。

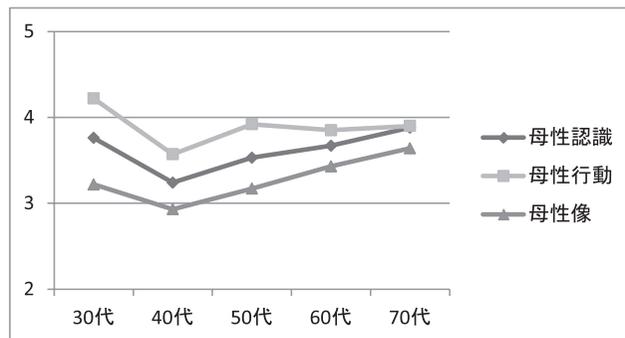


Fig 5. 各因子における年代別傾向

次に「母性愛」信奉傾向尺度因子の質問項目の他、問1、問7、問17、問18、問19について年代別に分類した結果、どの年代においても子育てしている親に対して支援したいという気持ちを持っていることが分かった。その反面、年代が高くなるほど今の子育てに関する方法や意識は自分が子育てしていた頃と比べて大きく変化していると感じ、また最近の親は子育てに手を抜いているという印象を持つ傾向がみられた。

Table 2. 子育て中の親に対する意識の年代別傾向

	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代
問1. 自分が子育てした頃と比べて今の子育ては変わったと思う	3.6	3.5	4.0	3.9	4.0
問7. 最近の親は子育てをサボっている	2.8	2.9	3.0	3.0	3.9
問17. 自分が子育てした時も子育てサロンがあったら良かった	4.0	3.5	4.3	4.2	4.0
問18. 子育てサロンでは自分から親子に話しかけている	4.2	3.9	4.2	4.1	3.9
問19. 自分にできることがあればやってあげたい	4.6	4.1	4.6	4.3	4.4

考察

今回の量的調査結果では、はじめに属性として子育てサロンのスタッフは60歳代から70歳代が7割以上であり、サロンを利用する20歳代から30歳代の子育て中の母親にとって自分の親か、それ以上に年齢差があるスタッフが多いことが分かった。なぜK市の子育てサロンには年齢の高いスタッフが多いのか。理由として、まず各地区の子育てサロンを立ち上げる際に、民生委員や児童委員を中心にしてスタッフを集めたことが挙げられる。民生委員や児童委員は、地域の公民館活動や福祉活動などに所属して地区活動を長年おこない、地域の状況もある程度理解している人が務めていることが多いからである。その他の理由として、町内会活動が盛んな地域の特性を生かして各地区の婦人会活動に働きかけたり、以前に保育所や幼稚園に勤めた経験がある人、さらに日常生活の中で時間に余裕がある人々に呼びかけたりした結果、年齢の高い人たちがスタッフとして多く参加することになったと考えられる。小松（2007）は、民生委員の役割として「“日常的な支援”が最も大きな役割を占めている。」と記し、「地域における役割が専門職の配置に伴って変化してきていることの一部を表している。」⁷⁾と述べている。民生委員は、市から委託を受けて子育て支援事業である乳児家庭全戸訪問事業⁸⁾も行うことが多く、同じ地域に住む人として子育て家族の身近な“知り合い”となっている。これについて上野谷（2004）は、「高齢者は、日常生活を地域社会で送り、長い人生を例えば子育てや企業人、組織人として過ごしてきた苦楽の経験があることから、『社会性を持った当事者』と言える」⁹⁾と述べている。地域の子育て支援を行うにあたって適当な人的資源であると言えるだろう。

今回の調査ではスタッフのほとんどが子育てを経験（97.7%）している人であった。スタッフの募集は、地域のボランティアに広く参加を呼びかけているものの、特に子育て経験がある人や、母親と関わりやすいという意識を持つ人が参加しやすかったのではないかと考えられる。あるいは子育て経験が無い人でも、保育所や幼稚園での保育者としての経験が参加の動機

になっていると推測される。また、ほとんどのスタッフ自らが住んでいる地区の支援（98.8%）を行っていることが分かった。K市は伝統行事を中心にした活動が活発で、地域の住民同士が関わる機会が多く、地域への愛着や関心が高い。¹⁰⁾ サロンのスタッフは、地元で生まれ育った人が多く、地域に貢献したいという意識が強い。また上記で述べたように各地区の民生委員や各福祉委員会、婦人会などから参加を促した経緯があり、自分たちが住んでいる地域活動に積極的に参加しようとする傾向がある。¹¹⁾ しかし反面、一部では同じ地区に住んでいる親子のみを受け入れ対象にしているところもあり、サロンの開催頻度や受け入れ年齢、対象者の範囲は各地区のサロンのスタッフの判断に委ねられているのが現状である。これはいわゆる同じ地域に住むスタッフと利用者の相互が知り合う関係をつくり、深めていくことを旨とする考え方に依拠していると思われるが、異なる地域に住んでいるいわゆる“ママ友”と一緒に利用できないケースが予想される。今後、子育て支援の理解と活動の周知を前提に、サロンスタッフをはじめ支援の当事者らが広い視野に立って内容の充実を図っていく必要があると思われる。

次に、「子育てのイメージ」についての質問結果から、「楽しい」「元気になる」「感動」「生きがい」など、育児することは養育者の生き方や考え方にプラス面の影響を与えると捉えられた。その反面、「しつけ」「大変」「責任」の項目が挙げられるなど、子育てに対する多面的な感情表出を読み取ることができた。また、「孤独」「悲しい」「無力」「損」といった子育て支援の対象となり得る項目の回答はゼロであり、最近の乳幼児の子どもを持つ親が抱く危険性が指摘されている育児の孤独感や、自分の子育てに自信が持てないことで抱く可能性がある無力感、また子育てが家や社会のためといった社会的価値よりも、自分にとっての個人的価値が重要視されつつある現状¹²⁾ について、スタッフが共感することの難しさを示唆する結果となった。他方、「子どもイメージ」項目では、「子育てイメージ」結果にみられる年代別の大きな差は見られなかったが、回答項目の「楽しい」と「宝もの」を比較すると、各年代の傾向に変化が見られた。「楽しい」「宝もの」の項目は、自分の子育て経験を通して、子どもを「楽しい」項目に当てはめ、利用者の小さい子どもと接することで「宝もの」項目に当てはめているのではないかと考えられる。スタッフは、サロンに来ている幼い子ども達に我が子の幼かった姿を重ねて、あらためて子どもや子育ての大切さを実感しているのではないだろうか。「子どものイメージ」は「子育てのイメージ」結果と同様に、回答者自身の育児体験が深く反映されていると考えられた。

以上の結果は、サロンのスタッフが「子育て」を考える時、自分の子育て体験をもとに一般的な「子育てのイメージ」や「子どものイメージ」に反映させた結果であると言えるであろう。つまり、「子育て」や「子ども」のイメージは養育者の個人的体験に依るという意識が強く働くことによって、他者の育児の方法、あるいは育児観に安易に立ち入り、共感することが困難であることを無意識に了解し、自然に自分の経験知としての子育てや子どものイメージを一般的なイメージに当てはめようとした結果ではないだろうか。なぜそのような心理が働くのかについて、柏木（2008）が「かつて家々は物理的にも心理的にも今ほど壁がなく、子どもは自分の親だけでなくよその家族や近所のおとなたちにも見守られしつけられてもいた。それが消失した一方で、他人に口を出させないわが子主義が広まっていった。折しも、母との一対一の関係が大事との愛着理論が提起され、その理論の拡大誇張が母親による育児を最善とする風潮を

いっそう助長した。」¹³⁾と述べているとおりであろう。「子育てのイメージ」や「子どものイメージ」は、子どもを育てる中で誰もが抱くであろう喜びや苦労を共有できると考えられることから、サロンのスタッフ一人一人の育児体験が色濃く反映されている。その反面、回答者の97%が子育て経験者でありながら、育児それ自体が個別のものであり、さらに時代によって子育てや子どもに対する意識が大きく変化しているという心理によって、自分の育児体験知以外の捉え方を持たない、あるいは持つことを躊躇う気持ちが表出していると見ることができる。前述の柏木(2010)は、「最近、結婚は個人の選択の問題となった。とはいえ結婚しているか否かは、依然として一人前とみなす条件とされている。」¹⁴⁾と述べている。かつて結婚し出産し育児することが前提であった従来のライフコースから急激に多様化しつつある現在の女性の生き方は、世代が異なることで理解することが難しい一面を持つ。しかし子育てという共通した体験や、子どもの成長にともなう親としての子育て観の変化によって世代を超えた共感的理解が得られる可能性は高い。サロンのスタッフの回答結果からは、子育て支援の対象である母親が抱える問題の根本的理解と、スタッフが共感的に子育て支援に参加する必要性が認められたと言えるだろう。

質問項目の20問中、「母性愛」信奉傾向尺度の13項目を主成分分析した結果、「母性意識」「母性行動」「母性像」と命名された3成分の傾向は、年代別特徴を持っていると考えられた。江上(2014)は、「『母性愛』概念への賛否と現実の自分の生活に矛盾がある場合、母親の語りが全体的に否定的であることがわかった。しかしながら同時に、『母性愛』を肯定・否定するそれぞれの立場の母親の中には、母親が一人の女性として『母性愛』概念と自分の親としての意識とのせめぎあいの中からそれぞれが自分らしい着地点を見出す姿も見られた。」¹⁵⁾と述べている。今回の調査で抽出された3つの成分は値の違いがあるものの、いずれも40歳代の時期に「母性愛」に否定的な傾向を示していた。それは伝統的な性役割の概念¹⁶⁾と自分らしい母性の意識とが葛藤する時期であり、子どもが成長するにしたがって経験が積み重ねられ、50歳代以降、親としての意識が形成されていく上で重要なプロセスであると言える。

課題

今回の量的調査では、子育てサロンスタッフの基本的な属性と「子どもイメージ」、「子育てイメージ」、さらに「母性愛」傾向を知る基礎データの収集を目的とした。しかしながら今回の傾向結果や数量的解析からは、サロンのスタッフ個々の考え方、実際の母親への向き合い方や接し方に、「母性愛」という概念や伝統的な育児観がどのように影響しているかまで十分言及できていない。小松(2007)は、地域による支援の中での民生児童委員の役割として、「専門職に期待されるマネジャーの役割の一部を民生児童委員が担い、専門職と民生児童委員が連携して、家族支援のためのネットワークの総合的なマネジメントを行うことが、現実的かつ有効な手立てであると言える。さらに、近隣住民と民生児童委員との連携によって、専門職には困難な潜在的ニーズの発掘や、早期発見を期待することもできる。」¹⁷⁾と述べ、民生委員をはじめとする子育てサロンのスタッフが果たす役割が重要になっていることを示している。今後、子育てサロンのスタッフの心的傾向を踏まえ、母親の認識や母性傾向について理解を深めるた

めに、スタッフの意識傾向の継続的調査研究をおこなっていく必要があると思われる。さらに、子育てサロンの利用者である家族を対象に調査を行い、スタッフの意識調査と比較することによって、利用者とスタッフとの意識のギャップを明確にしていく。それらのデータを基に、K市における地域活動としての子育て支援の具体的な方法について、スタッフをはじめ支援者が共通に理解することを今後の課題にする。

付記

本論文の調査研究及びその一部は、日本保育学会（2013年第66回大会）において口頭発表に用いた。

引用・参考文献と資料

- 1) 社会福祉法人全国社会福祉協議会（2010）「虐待予防のための地域支援の展開」p32事例No. 1：社協が推進する小地域福祉活動を基盤とする子育てサロン
- 2) 住田正樹（2010）「子どもと地域社会」p113
- 3) 大阪府（2005）「こども・未来プラン」p21第1章子ども、青少年を取り巻く状況3子どもと子育てをめぐる状況（5）子育てに関する保護者の意識
- 4) 山縣文治（2008）「保育サービスの展開と地域子育て支援」保育学研究第46巻第1号p62-70 日本保育学会
- 5) 堀洋道監修（2011）「心理測定尺度集Ⅳ現実社会と関わる〈集団・組織・適応〉」サイエンス社
- 6) 江上園子（2008）「子育て期にある母親の「母性愛」信奉傾向における主観的な意識」お茶の水女子大学人間文化創成科学論叢第11号p421-430
- 7) 小松理佐子（2007）「地域における相談活動と家族支援ネットワーク－民生委員児童委員の役割を考える－」社会福祉研究第98号p43
- 8) 「市町村の区域内における原則としてすべての乳児のいる家庭を訪問することにより、厚生労働省で定めるところにより、子育てに関する情報の提供並びに乳児及びその保護者の心身の状況及び養育環境の把握を行うほか、養育についての相談に応じ、助言その他の援助を行う事業をいう。」児童福祉法 第一章第六条の三④
- 9) 上野谷加代子（2004）「高齢者の地域生活を支える新しい福祉システム－自治体・民間の協働の視点から－」社会福祉研究第89号p17
- 10) 平成25年度市民意識調査 第1章第3住みやすさ意識調査p18 岸和田市2013（平成25）年12月
- 11) 内田江里（2002）「地域支援におけるネットワーク」家族療法研究第19号 No.3p20-22 日本家族研究・家族療法学会
- 12) 柏木恵子・永久ひさ子（2000）「子どもの価値研究」Value of Child. IACCP学会発表
- 13) 柏木恵子（2010）「家族心理学 社会変動・発達・ジェンダーの視点」東京大学出版会p296
- 14) 柏木恵子（2010）「家族心理学 社会変動・発達・ジェンダーの視点」東京大学出版会p64
- 15) 江上園子（2014）「養育者としての意識と性役割観との融和・相克－父親と母親の語りから－」日本発達心理学会発表論文集p18
- 16) 大野祥子（2012）「育児期男性にとっての家庭関与の意味－男性の生活スタイルの多様化に注目して－」発達心理学研究第23巻第3号p287-297 日本発達心理学会

- 17) 小松理佐子 (2007) 「地域における相談活動と家族支援ネットワーク－民生委員児童委員の役割を考える－」 社会福祉研究第98号p46